

キックオフシンポジウム

書くということと私 - ジャーナリストからのメッセージ

2008年12月7日(日) 13:00~15:00 津田塾大学小平キャンパス5号館5101教室

「社会貢献は書く力とプロジェクト推進力から」における取組について ライティングセンターと学生主導型プロジェクトを両輪とするリーダーシップ養成プログラム

グローバル化と情報化が進んだ現代社会において、文書による表現力を備え、プロジェクト推進力のある人材のニーズは益々高まっている。国内外において円滑にコミュニケーションを図る力量は、仕事の企画・立案・実施・運営に必須の要素であり、その基盤となる日本語力強化のニーズが産官学各界で指摘されている。

日本人の英語を駆使する力は、母語である日本語力や日本文化の理解に裏打ちされていてこそ、独自の社会貢献を可能にする。日本語力強化に軸足を置いた「ライティングセンター」での取組で、自らの意思、思考、論理、感性を書き言葉で表現できるライティング・スキルを養成することは、キャリア教育の根源に立ち返ることでもある。日本語力とりわけ「書く力」は、交渉力や発表力などすべてのコミュニケーション能力に通じる人間力の基礎ともなる。また、このコミュニケーション能力の実践の場となる「学生主導型プロジェクト」で企画と運営の実体験を通じたリーダーシップスキルの養成を目指すことにより、一層の人間力向上を図り、多様な場面に対応できるコミュニケーション能力とプロジェクト推進力に優れた国内外の現代的ニーズに対応できるオールラウンドな人材育成を目標とする。



有馬 真喜子氏

1957年津田塾大学英文学科卒。57年～68年朝日新聞記者。68年～85年フジテレビニュースキャスター。この間、メキシコ、デンマーク、ケニア、3回の世界女性会議を取材。その後、横浜市女性協会理事長、国民生活センター会長などを歴任。1986年～97年国連婦人の地委員会日本代表。2001・2年国連子ども特別総会総理大臣個人代表などを務める。現在国連女性開発基金日本国内委員会理事長など。



天野 由輝子氏

2000年津田塾大学国際関係学科卒業、日本経済新聞社入社。最初の4年間は大阪経済部で機械や外食、サービス業界などを担当。04年3月から東京・生活情報部で週末の情報紙「プラス1」やタ刊生活面などに執筆。暮らしにまつわる実用情報や働く女性や家族、食の安全などの問題取材した。2008年9月からさいたま支局で市政や地銀、地元企業などを担当する。

大原 悦子氏

フリージャーナリスト。2008年11月より津田塾大学特任教授。
津田塾大学国際関係学科卒業。82～99年まで朝日新聞記者。在職中の92年ハーヴァード大学ケネディ行政大学院修士課程修了。夫の転勤で2000年7月～2年2ヵ月ローマで過ごす。訳書に『ソウル・トゥ・ソウル』(朝日新聞社刊)。著書に「ローマの平日イタリアの休日」「フードバンクという挑戦 貧困と飽食のあいだで」がある。

松本 侑壬子氏

津田塾大学英文学科卒業。映画評論家/大学教員。
1968～2000年 共同通信社記者。(国際局で英文記者。編集局文化部で映画、女性問題、生活経済、ファッション、家族問題など担当、次長。調査部部長職)
2000～2008年 十文字学園女子大学社会情報学部教授、2008年3月より特任教授。現在月刊誌「婦人之友」「女性情報」「We Learn」に女性の目で見た映画評を長期連載中。